



俳諧
遊膳傳
外
三卷



浴の一途居室道は
はうの方たうへ
むらうめうたう
のりうのむうつう
柏印し子をさし
誰かあやうをさ
りのはうのあや

偉句後句のひきこめら
徳付し五平卯帖を名し
つらまらぬのよめを
言に句はるの句をし
母をひり奉んとなり
たぬいしりあり母を
相違ふとらぬらん
の

はの存ひつ
先著のあのをこ
まのそらわを
ゆかぬのうをゆ
りしあのみを
五つあつて
若門を



藤下 画



藤下 画

閑居 書

閑居 書

閑居 書

京都 一道居梨春編

浪花 黄華庵南齡校

浅生菴野坡著

俳諧遊勝傳

寂 栞

寂といふを淋しみ也すくよ行て眼よ見えぬ余情の自
然と寂しき出さるをいふなり

古池や蛙飛こむ水代音 祖翁

むかしとかり古家敷よ草茫々と生茂り荒さる古池よ
蛙の飛こむありさま其音忘んくと誠よ目よ見えぬ
寂しきこそ出ぬを能味うて知るるよ忘りよ云ハ細
とかり詞つゝきやさしく句中よ顯えぬ糸筋の感情

出たるを云也

真 艸 行

真とハ不易よして風情也譬ハ五色の糸を亂たるる如

象瀉や雨よ西施る合歡の花

祖 翁

真ハ束帶して朝よ立よるすかたを見るる如し正しき
姿也附合ハ心詞の掛合よるをいふ也

行と云ハ風情よして地也尋常よ世情を見盡したる姿
也悠々と逍遙せる道人の如しといへり

振賣の鴈哀をなり 蛭子講

祖 翁

是若き公卿の直衣姿を見るる如く花麗よ聞え侍るや

うよ句作るへし附合ハ心詞大形寄合と云也艸とハ流
行よして其情のやとけよるをいふなり

道を見よして走る鹿を追へる山人の如しといへり

むるし聞け秩父殿さへすもふ取

祖 翁

是僅なる所よ意味を合よ一興あるへし諭ハ白衣よて
疊さえりよき人を見るる如し附合ハ趣計付るをいふ

俳 諧 古 選

三宅彌山編

梅る香よのつと日の出る山路るな

えせ次

画 中 妙 景

花の雲鐘ハ上野る淺艸る

全

幽玄無涯

元日や晴て雀の物ゝり 嵐雪

不説祝賀還在其中老成

黄鳥の身とさるゝさるゝ初音哉 其角

真而奇

よし此山又ちるゝよ花めぐり 去来

秀生_ニ於骨_一

啄木や枯木とさるゝ花の中 文艸

終日敬々者尤可_レ恰_ム

むしりてハ_クを捨春の艸 米山

和平尤妙是春興

菜の花や淀も桂もこすき水 言水

春景美

不二よそうて三月七日八日ゝな 信徳

古今題_ニ芙蓉_一作無_ニ此編_一者

正大順流而味無窮可_レ稱_ニ絶作_一也

○

老_ニ友四五人_一打よりて盃とりゝハ_一打語

ふ_ニ流石_一と帚木の巻の例_ニハ_一からひる糸て

え_ニ雨やひと夜名所の品_一きた免 犁春

本地の爐縁_ニかよふ_一松風 柏年

紺繪_ニこゝろ引_一つ酢かけん_ニ 瑛曉

功者ふるまて旅をき_ニけり_一 葉舟

はつ月ハるねて見ここの天氣相
露翠
西瓜えさけをえさむ家間
執筆

初空の不二を神國のたから也
東京
詢菟齋

神も初と一さそを四方拜
春湖

初日影よほふや更よ山むつら
全

氷より雪より摘て芥なつを
全

羊棚やとも一ニツを庵の富
永機

海苔の香や朝のまゝるをわよまる
全

吉野紙さらけあふりも春の水
全

子れ愛ハかざるよ志る一着衣始
鶯笠

日れさしてうゝるの寒き柳哉
全

淡雪や舉よをれ一鷹の顔
東京
全

寒くとも一日ら一や小田の鶴
梅
羊

落あうて寒心事いふ梅見哉
全

積雪や梅をさかゝら咲初る
吳仙

ぬからけよまといも聞て初鳥
成雅

黒木賣る顔も有かり若菜賣
素水

臺處をえさらく名あり嫁る君
全

輪るまゝや門の柳の枝よまて
採花女

叢入や叢の下道久一ふり
全

門松よかゝるや町の人の墓
花朝女

水よりも先へ和らく柳るな
 雪こもりたる日も有て松のうち
 あまりきへきらけ其まよかさりなは
 常盤木とちるふ柳の緑り哉
 梅る香やけふの馳走の胡摩豆腐
 十種香のるをり紛をつ梅の花
 豆打や齋えやよの齋よ似に
 若草や拾ひ歩行の薄草履
 すよみ出て咲よけよきや崖の梅
 橙を鉢かふるらかり床るをり
 垣根まてけふ頃口の霞るぬ

全 精 知
 全 富 水
 全 指 直
 菟 好
 松 塙
 照 平
 等 栽
 全

入組の門も知をよよ松るさ
 草の戸もかたる事をき御慶哉
 芽のそよつまての葉をりや檜柏
 絹市のこむ中よある余寒かな
 酢の利の料理るち也春の月
 咲えこそ雪も忘るを山の梅
 雉啼や切ぬく山の道えよめ
 跡忘さりすれハ日けさけ柳るぬ
 傳りよ井の徳知るや初手水
 献立よ立派な名かり小殿原
 野遊の杖のえよめや小まつ曳

文 種
 知 泰
 全 水
 蘆 水
 酉 山
 茂 精
 シモツケ
 全 山
 此 山
 イハシロ
 忍 山
 全 山
 自 省

淋しものとれてとるしや春の鹿
若水や不斷ハ汲ぬ人のくむ
みか人れ心よ咲やとし花
ふり賣れ塩魚からし梅花
御降もよ雪花そ世を静
笑ふ聲うふ鷄みかことし
鶯の氣よもあうよる藪屋敷
ちる頃さし柳のみとり哉
橋こえて又橋のある柳るね
える雨や二葉の麥よ藥ほと
水仙やとしのえしめれ詠め艸

全 袋 全 甫^{リクチウ} 素^{カゴ} 吟^イ 三^イ 全 連 全 成^{スルガ} 叟
全 蛭 山 山 風 友 水 水 泉

とく咲て闇よ入夜やうめ白き
提て行酒よかえせて梅やなき
一組を小野から出より若菜うり
むく起の眼のすくよ行柳るね
山吹やかよ竹原を過てるら
この風を窓よゆきこむやなき哉
出きえ出さ仕合もあり初櫻
巢こがれの枝うきしけよ乙鳥の子
春雨や反古忘らるる亂箱

草 庵

爲 水 眉 泉 全 蝸 堂 青 溪 穗 堂 秋 圃^{トフツアフミ} 水 潤 十 湖 蓬 宇^{ミカハ}

やなきあり梅河りえるの長者ふり

夕ふけや柳よもとる野のなるめ
鶯や餌指子木まで春のいろ
しら魚のえさみこころやななき箸
青柳の雨まよ遠き曇りるね
鶯も来て啼る垣の青きうち
野を空のひくうかる程霞けり
よき客をまう茶て春の雪見るね
ひらく手も答の花や懸想文
鶯よおくれハとら一語そめ
萬歳や小腰かよめる舞をそめ

全 全 杜 半 汲 梅 赤 可 石 全
堂 仙 古 一 志 水 芝

うつくしう日の暮てあり月とう免
山里ひろくそよつ鶯
萩曳のみしるき袴着こかして
低心お上も又勝手あり
懸されえよふやうなる青すよき
菖蒲の花もさきそめるころ
裏庭いつも根氣よ織よめて
鉄も扱ふ唐崎の茶屋
たのしみも憂もかさなる出商ひ
志とるをもとるよ酔よあし元
志からまざる程笑ひ出た女とも

杏 梅 梨 喜 掌
塙 卿 春 水 山
塙 卿 塙 山 塙

ひつえぬ舟の繩きれし月
えつ馬も棹の運ひハ心得て
秋を寒かる宮奴の袖
丸石を敷せる庭のまきくよ
草履の品のよいハ藁志へ
咲花よ寝起の安い片ひきし
雲とがとみハ少し違ふそ
春のひま骨打て讀む土佐日記
関てハ一の刀鍛冶かり
とつざりと植木の鉢よ金とる
仁王門まで用あきハ来よ

春 水 山 塙 卿
春 水 山 塙 卿
春 水 山 塙 卿
春 水 山 塙 卿

下駄をくくらぬ雪を見らるる
誰もかゝるる鴛鴦の思ひ羽
行水此流を次第の遊女宿
上ぬりちるき曲突の兀
嘘をありいうて冬とも暮さる
かゝつえしから宗旨あきて
月今宵されとも雨のさんさ降
遠音かと猶鹿ハさみしい
肯狩よことしハ人のさんと来る
大きな岩をとりのける畑
柴垣もかゝる黒木の鳥居也

春 水 山 塙 卿
春 水 山 塙 卿
春 水 山 塙 卿
春 水 山 塙 卿

籠よ入る魚の鱗うつ
志つとして内よをらまぬ花盛
踏エ合よ一萌すまは州

水 山 塙

梅ハ七分咲く處満開よ

まされり櫻ハ花盛りもよ一

あまをかり答る花を未開紅
鶏の羽むしとふるふあよよる

梨 花

五加木飯何そ添へき菜もか一

重糸て置よ紙のふきちる

月の入跡をらくの稻ひかり

春 航 春 航 春

すまふの濟んで廣き畑地
劍鋒の出るよあても秋まつり
茶も格別よ菓子もてい糸い
甥をら下よおるれぬ役よつき
温泉處までハ高い駕ちん
厚着より薄着ハ夏れをまめいて
納涼床儿もいつる媒人
提灯ハ紅軒並よかんのりと
すよくまハる上野淺州
百兩ハ金ハされとも違ひをき
水よ不自由さよぬ堀ぬき

航 春 航 春 航 春 航 春 航 春 航

月今宵連哥れ友のうち揃ひ
廊下つゝへハひいやりとある
おく露も江りさうなる鞍馬石
つき出ーさるぬ一寸二鉢
別きさといふハ世間れ口ふさき
かみさもる以よ何よつあても
枯えてー柳よ家をとりにちるへ
万古焼かからあきる竈元
小村よを似ぬ氏神の結構さ
むらひの傘ハとこをぬあてよ
馬曳てとふきハ馬のを糸上り

春 航 全 春 航 春 航 春 航

正直ものゝいるいそらさち
月の宿坐布のこらに塞りて
秋てもやハリ鯛の賞翫
背かりの頃を野山も賑えーく
笑へハこらへ下駄てやつく
印籠の蓋をちよつこり取よくき
照てハくもり曇りてを照
遠近よまをゆきふとの花さかり
えつ音ハ朝よ限る鶯

春 航 春 航 春 航 春 航 春

七十の春を迎へて

萬歳の来されハ稚かこゝろるぬ
物るよき春よ越路の梅柳
門松や都も鄙の面忘るみ
太箸よならふ白ひハおりけり
若菜野やゆかしく思ふ人よ逢
出て見るや春よつ山の夕けしき
穂るなものよそめや夕あすこ
野よちて家よさけり初日の出
鶯よしても旅かり都入
されハとて暮やうもかし初日の出
ひらく日をえらみさう也福壽草

葉丸
全全
全青
全全
全柳
全至
全淡
全中
全錦
嶺

朝市や菘すよゝろふきる聲
夫と聞く聲の丸こや初るら流
初東風や朝日をよるむ袖よ入
浦よの波さへ清しえつ御空
える風を便りよ賣る風車
晴いまそかきし聲や初鴉
朝夕のつるぬいろかり遠柳
青空を興よひるへて霞るぬ
落出して落ぬ日もかき椿哉
井戸の水漏こがきてハぬるみけり
叢入のこけこやけふも蜆汁

旭扇
暗雲
全四
エツチカ
山林
カ
雪感
全招
全雪
全甫
全金
全威

青ぬゝや味もともあまいゝるのよき
火もあまいと打て焚也福とるゝ

新居賀

よき門やまや新年の人出入
我畑のあるゝ顔也芋の頭
半日ハこゝつて聞てゑる此雨
春なれや宵寐ゑる夜も更る夜も
扇よりうゑるものゝ初日影
けふ来るゝ極りゝも有禮者哉
そつ夢や不二より外ハゑゝもの
黄鳥の来ても居るかり障子こゝ

素湫
賢外

上毛
乙歌

ア
九峯

全

西
全
芥舎

全

全

碩水

さかゝらあるゝ違ハ流落の棠
窓の梅咲や春たつゝゝ程
春雨や不足も言へぬ宇治とまり
日をなゝめ空ハ雲雀の世界かな
ゑる雨や春日の森の夕ともゝ
梅さくや垣を好この建仁寺
最う朝も成ゝありや窓の梅
旅人の風呂も長居やゑる此雨
春雨や一節切ふくゑを是家
五分咲て十分の香やうめの花
星よさゝゝみのあり闇の梅

稻處

楓城

全

全

全

梅雄

全

露翠

全

全

拍年

遊ふよもこゝろ配りやまつのうち
 志ら梅や高きかどりハおのつら
 島山やこの初空を薄みとり
 山をえや眠りさまゝて初御空
 庭よ根の盡はめてゝ一落のう
 えつ夢やうきゝ事の跡や先
 草代戸や貢あまりのかさり依
 古き膳とゝ新らゝう居りけり
 講そめ鼓よかえる扇かな
 庵たのゝ驚けふも机先
 元朝や老も手輕の炭手前

ナニハ
 無勝 春人 竹人 松人 花松 仙齡 米洲 春律 梅雪 雨夕 鶴水

新年の齊たゝる也二番鶏
 釜る茶た一間ハぬくゝ福壽艸
 福壽艸二日立けりひらきけり
 野の家や霞をよてゝ呼ぶ童
 禮先の殖ていそゝるゝ三ヶ日
 初東風よ万才の袖ふくれけり
 見ゆる灯ハ吉方の神ゝ海のうへ
 書そめや朝日さゝこむ儿
 屠蘇酒や下戸も上戸も同ゝかと
 黄鳥や来て居るうちハ庵のもの
 えやされて青々増けり芥齋

ナニハ
 南雅 南圃 貴山 梧門 鶴齡 左牛 雅笑 南秀 豊水 青柿 九花

黄鳥や何のきけんのつゝけ啼
 折きよとて枝の伸しる梅の花
 いつの世も日数さゝめて松のうち
 試よ葉退けて見る接木哉
 春の雪積まよ梅の花よけて
 乗そめや水主も荷主も酒きけん
 白魚や水ハ青しと思はるゝ
 芥摘てまつるよあへる戸口哉
 瀬の音も余處よ静か柳哉
 初日より霞あゝへて不二の山
 香えしりて人仰けや屏の梅

ナニハ
 花航
 全
 似水
 蒼露
 不角
 南
 全
 全
 全
 全
 卓志
 全

風よりも水もひく香や谷の梅

尾道客中

としつや船のけふりのいろよ迄
 笹叢の折ふせ垣やうめれをぬ
 かそへるもいやはのち一雑煮餅
 萬歳や松の戸を出て梅の門
 鶯のえつ音隈を一日のひるり
 さゝ波も香も一えいや池の梅
 不斷見る海山なれと花の春
 おかろ夜や流石も丸き山の形
 めたるしのやをきハ家よかくれけり

雲水
 超室
 流芳
 ヤマト
 雪暉
 カハチ
 竹窓
 アハチ
 素香
 全
 周策
 全
 晩香
 キ
 梅屋
 壽泉

初空や松るらこが流日の匂ひ
畚負うの手よもやさしき董の取
と一玉や平ん扇よのせよまて
芥摘よえや来ふ跡よさゝ濁り
初鳥ひらく障子の向ふより
橙やるそへそ一めのかさりもの
羽音迄聞えてうれしそつ鳥
雪ハ先跡あら掃や藏ひらき
よき聲よ鶯啼ようめの宮
鶯よ道よもよ一知恩院
山かつら見ぬあさもあし三ヶ日

サヌキ 節 水
イヨ 士 乙
ハフキ 文 青
イヅモ 鶴 棲
ハリマ 曲 川
ビツチウ 三 精
庭 蛙 淵
吐 庭 月
素 吐 山
好

える雨や傾城町の長柄傘
うかくと花の中かり月あり
やなきより外よかけあきあるを哉

伊賀局

美しき手よカミある子の日か那
塩濱を志る一霞の引かから
う免柳氣のむくあるよ遊えるよ
別荘の見えら一廣きあすみるね
紅梅のいろよも似ぬや木のうつろ
暮かゝる日や萬歳の志とるあし
初午やこと一もてうと夕月夜

西 圃
三 酉
穆 堂
吐 月
ビンゴ 曉 雨
洞 雪
翠 影
喜 水
杏 塙
全

えつ齋ハ嫌れもせぬからびかぬ
下萌やこれらら鶏のよくまるゝ
里ふりや籠の鶯鉢の竹
床しさハ蚤も正月小袖るぬ
黄鳥や寝覺の里よ立けふり
紅梅よ一日ハ長一草まくら
見ろうちよ月ハをかれてうめの宿
雨をかいらえしる白帆や春の海
聲かくて美しう飛ふ胡蝶るぬ
門松よさえらぬ馬の行義かぬ
寂庭よふハと音して落椿

梅 卿
全 李 掌 不 蛙 雪 全 湖 一 犁
籠 山 乙 足 羽 石 石 曉

ビシゴ

春雨やけふも淋しき駕籠の中
人なれて暮残りけり花よ鳥
機やそむかあらぬか呼子とり
樹よ傳ひ家根よつよひて猫の戀
ちる花よおもひ残りて戻りけり
ひとりして歸るををしやえつ櫻
川畑や桃咲家の一からひ
馬よ乘頃よかりけり初さくら
文箱もつ女往来や花の春
雪のちる影も長閑けし初日の出
黄鳥や日よりきけんよ初音して

兔 青 寛 陣 全 霞 全 自 如 朗 柳
谷 我 良 年 洲 笑 雲 山 雨

十

鶴立の跡よ来てひく小松の如
若艸よ置よ法師の琵琶袋
行水の上つらなてるやなきが如
菜の花や雨をやるく日ハ高し
寒い日の長より小口やをつさくら
雨ちるよやなきくらと水のうへ
明てゆくよのめあてや畝火山
はるの水見えてかくれて野ハ長し
荒海ものそくや蝶の朝きけん
夕乙鳥湖水をふりよ出よりけり
正直よよつや蝶舞ふ野の日和

アキ 翠石
全 史白
世 杏園
由 池
ナガト 梅宿
アゼン 華跡
涼 波
椿 水
半 佛

と一壺といふ間明る一東山

晩節

還曆迎年

齒固やこれより老の一さかり
梅折や繋いよ牛を足代よ
筆をよめすよりの凍も解よけり
けさ咲を花の手からが福壽艸
折てある梅やよくとと思ふよと
足るよとを捜よあよら泥路の棠
見よ行ハ驚よつや菜切石
黄鳥のえつ音や雪のちる中よ
えつ鶏や人もちまよを競ふ聲

ブンゴ 嶺北
全 乙人
全 靈山
ヤマシロ 全 泰山
オハリ 如 山
静 處

春や来ん氷の下の柳鮪
 初竈よ瀬戸ハけふりて梅の花
 土ふまぬ人よ曳る一小松哉
 白魚や渚ハ山の朝日影
 裏白ハ何そ書さき名也あり
 白魚や氷のさはる篠の先
 える此月一足ことよ面白き
 一とせの祝ひるそへん初こよこ
 聲さや入帆むるふる初あららに
 里出して鶯も知是日のそそめ
 衾まふたまぬうちよえつ鴉

オハリ
静處

全 全 全 全 全 全 全 全
 静 處 全 全 醉 雨 全 全 羊 山 徂 康 杜 發

くつろきや七種過て雨一日
 家毎よ咲ても梅見とと哉
 都よも此一つるさや梅の月
 鶯や住吉に灯のともる迄
 夜ハ庵のよれよてきく田螺哉
 山の尾と申てもよ一梅の里
 船ふらも見上る梅や松の庭
 穂先ふら焚や余寒の束ね柴
 風ひるりするやとずあな春の水
 つめさも春のしつくや水馴竿
 ひけるのハ何の事なき小松かな

素 陽 其 慶 全 野 堂 全 秀 石 全 不 退 全 全 全 全
 全

全

氣長さも手のうちよあり白魚汲
見て来ぬを嘘のやう也鍋祭
朝使まゝして剪るやあきつえ
ついでこの家よ道なき青田かな

楠正成

楠や石よ成ても風かどを

脇屋義助

一樹ある花ちりてより木下閣
かしまりて海よあけうく若葉かな
見る人のなき日もひらく牡丹るな
人里をさして雨夜の螢るな

ついで門よよき田も有て夏の月
草の雨みよあき夜とハなりよあり
松陰や床よとよきハ漏く清水
るあゝへよ簾の青よ朝の窓
いつも今咲よいる也あきつえ
牡丹見や梅このかよの人れ来る
道よえよ草の中より百合の花
出船見て名残るかなる鹿の子哉
蓮の花低きハ池の深よあぬ
蓮帆や卯月の海を浅うゆく

走井

ナハリ

はーめ

更隣

アゼン 月 坡

西 一 京 巢

ビンゴ 桃 洲

スハサ 松 陰

素兄

スハサ 素兄

アゼン 鯉 洞

アゼン 傘 月

一外

月素

抱瓮

アゼン 其一

試水

只川

天籟

チクゼン 哇夫

市睡

維夕

三冊

盆よ盛る餅よ追えるよ新茶哉
一重つよ散て日のよつたん哉
五月雨や疊をのめぬ蠅の足
卵の花を志るへよ訪ふや夜の家
闇もあやほまはまそあれ時鳥
赫野や一鎌つよよ蚊のささく
秋近よ一浦ことこの夕あらよ
志ら雲のまよる緑りや夏の山
大庭の中の小庭のふらんるぬ
えつ秋や何かから吹て草れ風

アキ 一 角
ビンゴ 笠 洲
ビソナク 漂 潭
スルガ 宗 悟
エチゴ 訥 々
斗 月
ア 史 義
ナニハ 安 人

あふも又よい天氣也十日菊

我里岩代の山中よ寄石あり

秋風よいそ事問えん鶚鷓石
花よ蟻巻込てちる木槿るぬ
道もせよなるや野菊の一いろよ
朝のうち賣ものらしき桔梗るな
秋ながら水のうへ行かふるるぬ
虫の音のそこらよ満る山家るぬ
名月や晝とおもへはなくからに
えつ鴈や身よ志む風のきのふあふ
ともよ灯を有て甲斐なよ窓の月

ミマサカ 愛 藏
アキ 翠 石
ア 茶 狂
五 堂
民 也
雪 也
ビンゴ 推 齋
果 堂
雲 外
三 峯

島の灯も今宵ハ見え秋の風
旅人の引て潛りぬ鳴子網
初鴈や堅田の様子忘れぬえつ
松陰の障子も寒し後の月

楠正行

かへらしと晴出の鷹の別をるね

村上義光

えい雲を吹よへいよ野分るね
こころこよ軽うもひくや鳴子網
おして居る艦の手もゆるむ花火哉

奈良良

町鹿や斯まで淋しからうとハ

我ら事を我してうれし年任廻
鰯汁や味をすすりまても男の手
白鷺の雪も消こむ入江るね
行年よまよ雪も見ぬ都るね
夜明をえ互のものよ雪の家

十二月十三日出雲備後の境赤名の

驛よて三尺の初雪もあうて

大空へ登るこころちやゆきの山
手よさえる夜明の水やえつ水

三十一

一花

柳坪

橋雨

可松

翠影

竹人

松翠

桂雨

語外

玄黙

鳧舟

霞洲

花航

秀石

喜水

杏塙

本冊

祖翁忌

ひらきゆく道や十寸穂の枯芒
あへり咲これも花也きくらかり
山吹と櫻よ多ーかへり花
荅とて一輪もかへり花
言ハぬもつらーいふもうるさー
掛乞よむさー鐘の歌もるぬ
月のこゝ祇園林代灯もおほろ
かへるを告てまつるーき鴈
海苔の香よ心うきふつ旅なれや

所思

スルガ

肩

泉

タフツアフミ

蛙

村

ビンゴ

曉

雨

アキ

杏

村

東京

永

機

梨

春

丸

峯

柏

年

ちひさけれとも馴のよい歌
石菅のみとりハ花よまさる程
申刻下きと峯つくる雲
翠石亭ハ朗詠山下よあり
朗よ山のふけさせ菊のたな
かろことと露のかよる狭庭
身おろし駕籠も月見の人やらん
とらうてとるもあいさつのうち
綱引のすめハ盃事よかり
空のみとりを吹出は東風
一の洲と春の住の江向ひ合

葉

舟

稻

處

一

巢

梨

春

翠

石

身

春

と

石

綱

春

空

石

一

春

洲

春

燧ふくろを煎茶籠るら
手代ても羽織を着るハ別家並
紅よりやまゝ唇の墨
いろ白を顔の凄ハあらひ髪
のころ豆腐の水ようくわり
有明と成て師走の日もこつる
深雪の底よ待る絲る春
國のうち北のえつきの蒲萄村
塩のたこらよ見ゆる焼印
よ以衆ハ花よ丸きりかよりつめ
野風呂の口へうある春あせ

石 春 石 春 石 春 石 春 石 春 石 春 石 春 石

鶯の氣の進むる葉を弾き出
寺男めあませて歌よむ
菓子折をとりの直さは硯箱
いま一月て京よ一年
鶯喰ひあるら紙子の袖たよみ
もの狂ひとも見えぬ形ふり
合は手よ涙の玉のやちくと
戀の重荷をいつも脊負うて
塗笠の人めつららき丸太船
くちよ柳のちりのこりあり
追つ以てゆくもけしきの月の雲

石 春 石 春 石 春 石 春 石 春 石 春 石 春 石

祭りの楽臺もあゝらゝ
更衣はれハこゝろも常なら
えや本庄よ一ツ目の橋
兩替を看板までも錢のなり
菰ゑら出さぬやうを相
咲すまは花を限りの道つくり
敷ものゑら居ハる五形田

閑坐

翁忌や小篠よかゝるき雨の音
其世は冬よ似さる静さ

梨安
春人

春 石 春 石 春 石 春

旅こゝろをさるゝかとも旅をして
舟は馳走ハ出来さてのめ
日をえれてまた有明は影をもち
をりく鹿はのそく柴は戸
を以用も何やら秋ハおくれるち
真岡木綿ハ絹よ及ハぬ
あの嫁よあの姑ハおあてゑひ
子安の塔へ月まありはぬ
すらくと楓若やく風の吹
夜みしゑらとて鶏も寐過は
いくつまで生ると人よ笑ハれて

小窓

人 窓 春 人 窓 春 人 窓 春 人 窓 春

胡摩饅頭のひつこいを好く
この頃を動きもあらき茶の相場
ハ専前ハちるふ朝空
月花よ捨る浮世あるもの
こたつふさけハ遊えさぬ杖
水鳥の汀へあつまりて
出張の山のすそを白髪
玉みその真るいまよ鼻よつき
授戒もすんで跡のひつそり
莖拂ふ明り障子のあふるくて
やせて見せうと寒ンも薄着よ

春窓人窓春人窓春人窓春

怪我よさへ切よ小指をとめられ
逢秘えふそく逢よれハ又
更てまて霄のけしきの順慶町
月のひよりよ星ハとこへる
芒から尾花よなるも久くて
とれよふとつよ掠鳥賣よ行
神酒の口付木さしても事ハ濟
上さほ日より殊よ四ノ月
充分よ揚てぬれ帆を干ておき
ところよも似て子供大勢
細道を行え段々花の中

人春窓春人窓春人窓春人

志どりのふるき暮の鶯

窓

行年や柳をらへハ梅がーき

南

齡

間毎一つふる掃まふ煤

犁

春

雨上り馬代蹄の跡見えて

齡

月の出るやらそこらあふるき

春

取入るえりりよ成ー叔こをー

齡

まよ羽根青き垣のゑまきり

春

寐てを居ぬ常念佛代かぬの音

齡

富田林ゑ木綿商人

春

出るらー代方が麥茶の味のよー

齡

えたかくらーの夏代氣安き

春

くらかりて涼てをきハ咄かき

齡

竹代床儿ニ烟草火もおく

春

月前ニ鮭のはーりハもらひもの

齡

こきらハ市ニかけぬ新絹

春

見込ある年齒若すまふよこーと

齡

大盃をうぢる兩代手

春

雪とちる花とめやうもかい事か

齡

えるハをかいや雀いろ時

春

暖うなりてもふーい櫛炭

齡

いまころこーへ来るハ今井船

齡

小重箱菓子か肴か覺束な
能見て欠ひするハ何やつ
とれも皆師走忘らぬの旦那衆
白粉好れめうつ灯うつり
浮身とハ濱邊の宿の名前ら
風よ古葉もおかぬ並松
拜殿よとらぬ圓坐もニツ三ツ
別よ遠音のさぬハ高麗笛
后れ月つそりとかりの暗よ成
突て間のおい鳴のふり賣
芋蔓もたくる畑のやよ寒く

春 齒 春 齒 春 齒 春 齒 春 齒 春 齒 春 齒

るへーた筈の傘の催促
碓部家のつよきよ家を建出して
素麵仕こむ時ハあまえぬ
ひより送うつきりとする初花よ
池をまハれハ足りる摘草

齒 春 齒 春 齒

明治十八年二月十日出版御届
同年三月 日出版

定價金貳拾錢

編輯人 京都府平民 北川 犁 春

上京區第廿三組花立町
十一番戶

出版人 京都府平民 山鹿福三郎

上京區第廿八組塲之町
三十三番戶

今般帚木集出版し貴覽に備ふ其趣旨ハ三府名古屋及海内諸名家之
近作を輯纂し編を繼ぎ一ケ年に四五回發行し追て源氏五十四帖よ
充てうひまかひの人々の便りとあさんとす尙後編空蟬集ハ來る四
月十五日を限り玉草至着の都合にて花櫻の句より晚春初夏之佳作
澤山御惠投を希ふ若し遅來之分ハ次々編夕顔の卷に掲載すへきも
のとす

口 換

○定費則

發句一句	加入集一冊送り	前金拾七
	二回加入同	同 三拾貳
	三回加入同	同 四拾六
	四回加入同	同 五拾八

但集册急送御望ノ方ハ一冊分ニ付郵券四錢御添可被下候其御沙汰無
之方ハ通運便テ以遞送可仕候

○加入ノミ之部費則

歌 仙 一 卷 一回 前金壹圓貳拾錢

校合兩宗匠之事

五十韻百韻ハ之ニ準ス

明治十八年二月十日出版御届
同年三月 日出版

定價金貳拾錢

編輯人 京都府平民 北川 犁 春
上京區第廿三組花立町
十一番戶

出版人 京都府平民 山鹿 福三郎
上京區第廿八組場之町
三十三番戶

口 換

今般箒木集出版し貴覽に備ふ其趣旨ハ三府名古屋及海内諸名家之
近作を輯纂し編を繼ぎ一ヶ年に四五回發行し追て源氏五十四帖よ
充てうひまぢひの人々の便りとあさんとす尙後編空蟬集ハ來る四
月十五日を限り玉草至着の都合にて花櫻の句より晚春初夏之佳作
澤山御惠投を希ふ若し遅來之分ハ次々編夕顔の卷に掲載すへき也
のとす

○定費則

發句一句	加入集一冊送り	前金拾七
	二回加入同	同 三拾貳
	三回加入同	同 四拾六
	四回加入同	同 五拾八

但集冊急送御望ノ方ハ一冊分ニ付郵券四錢御添可被下候其御沙汰無
之方ハ通運便ヲ以遞送可仕候

○加入ノミ之部費則

俳諧歌仙一卷 一回 前金壹圓貳拾錢
校合兩宗匠之事
但五十韻百韻ハ之ニ準ス

句一行とを一回ニ付 同 四錢ノ割

但文章 はし書 道ノ記ノ類
 ○出句の有無によらず集冊御望の方の一冊に付前金拾五錢
 右御加入之諸君發句ハ一句御加入タリトモ必四五句御認可被下付
 様希上候

發起 京都 馬場 鹿場 柏葉 年舟

補 西京 柴一 交 九 社
 近江 田 雅 峯
 浪花 田 雅 峯
 同 佐 藤 花 航
 同 山 本 鶴 畝

御文音所

京都四條御旅町 湖雲堂 馬場福利助
 京都烏丸三條北 點林堂 山鹿福三郎

本集廿五丁ノ計畫ナリシモ各風氏ヨリ意外賛成ヲ得王詠机上ニ堆
 ノ榮ヲ得今回限り丁ヲ重子タリ次編ヨリハ豫定ノ丁數ニ歸スヘシ

